

5 “伝わる”水族館 ～展示・調査研究・体験をつなぐ環境教育の実践～



栗田 正徳
KURITA Masanori

名古屋港水族館／館長

名古屋港水族館は、「エコ・アクアリウム」を拠点に、環境教育を実践している。体験型プログラムを構築し、海洋プラスチックごみの問題や海洋生物の保全に対する来館者の理解と行動変容を促す同館の具体的な取り組みを解説する。

名古屋港水族館

名古屋港水族館は、愛知県および名古屋市から財政的な支援を受けて整備された公立水族館です。名古屋港水族館条例では、「水族に関する知識を広め、水族への親しみを深めることにより、住民の自然環境に対する意識の高揚を図るとともに健全な余暇の活用に資する」ことを設置目的としており、現在は指定管理者である公益財団法人名古屋みなと振興財団が管理運営を行っています。

施設は、南館と北館の2つの建物で構成されています。南館は「南極への旅」をテーマに、日本から南極へ向かう航路で出会うさまざまな生きものを展示しています。一方、北館は「35周年はるかなる旅 ～ふたたび海へもどった動物たち～」をテーマに、進化の過程で陸から再び海へ適応したイルカやシャチなどの海生哺乳類を中心に紹介しています(写真1)。このように、南館では現在の海洋環境とそこに暮らす生物を、北館では地球環境の変遷と生物の進化を、それぞれ異なる視点から学べる展示構成となっています。総展示水量は約2万7,000トンと国内最大級の規模を誇り、年間の来館者数は約240万人です。来館者の多



写真1 名古屋港水族館全景／左が南館、右が北館

くは愛知県をはじめとする東海地域から訪れていますが、近年は国内外からも多くのお客様を迎えています。

環境教育のための展示室の設置

2010年に名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(CBD・COP10)の成果である愛知ターゲットは「2020年までに生物多様性の損失を食い止めるための行動をとる」というものでした。また、名古屋市は令和元(2019)年、内閣府より「SDGs未来都市」に選定されました。名古屋港水族館は公



写真2 アトリウムから見た「エコ・アクアリウム」

立の水族館として、これらの社会的な動向に対しても環境教育を通して官学と協調して活動していく必要性を認識しており、指定管理者としての義務とも考えていました。館内の展示はテーマが明確であるがゆえに、新たなものを入れ込んでいくことが難しい面もあり、こうした要請に応えるために展示室を新たに設置することとしました。

しかし、館内に十分なスペースがないため、繁忙期以外はあまり利用されていない南館・3階の休憩コーナー(93.5m²)を改装し展示室としました。東面がガラス張りで、3階までの吹き抜けになっているアトリウムに面しており、南館のエントランスからも目立つ部屋でしたが、展示順路に従って移動すると動線から外れているため、行き着くのは難しい場所でもあります(写真2)。

水族館に係る環境問題といっても多岐にわたるため、その時々での社会の課題となるような展示ができるように簡単に展示替えができる設備としました。また、単なる展示室ではなく、水族館の環境教育の拠点となる“場”の創出を目指しました。

このため展示としてはパネル(B1サイズ)×10枚、55インチモニター×2台、65インチモニター×1台、展示ケース×2台を壁に沿って配置し、部屋の中央部は空間を十分にとりました(写真3)。

展示室の名前は「エコ・アクアリウム～海の未来を考えよう!～」(以下、「エコ・アクアリウム」)としました。水槽のない部屋ですが、水族館内の施設であることからあえて“アクアリウム”という名称を付けました。この部屋を名古屋港水族館の環境教育の拠点とし、館内の随所に関連した展示を展開していくことによって、「名古屋港水族館全体が環境教



写真3 「エコ・アクアリウム」内部

育の場でありたい」という姿勢を組織として示したものです。

「エコ・アクアリウム」の展示

平成29(2017)年にモナコ水族館の館長の呼びかけで「World aquariums against plastic pollution(プラスチック汚染に対抗する世界の水族館)」という連携活動が行われ、翌年10月には、欧州委員会(EC)、国連環境計画(UNEP)等が世界中の水族館の協力を募り、プラスチックによる海洋汚染問題についての啓発活動を促進しました。このようにヨーロッパでは海洋プラスチックごみ問題に対して水族館を活用する動きが活発でした。こうした流れから、「エコ・アクアリウム」オープンに際して海洋プラスチックごみ問題を展示の中心に置きました。パネルは事実を淡々と伝えるとともに、海洋プラスチックごみ問題を自分事として考えられるような内容にしました(表1)。また、SDGsの17の目標のうち、パネルの内容に相当する目標のアイコンを入れることにより、学校団体の環境学習に役立ててもらえるように配慮しました。

3台のモニターでは、表2に示した映像資料をそれぞれループ再生しています。オリジナルは1本だけですが、その他のプログラムは主に地元の公共団体と外郭団体が作成したもので、海洋プラスチックごみ問題が来館者にとって身近な場所での出来事であることがよく分かる内容になっています。名古屋市環境局のプログラムには筆者自身も出演しており、ここでの展示の内容や趣旨を解説しています。

展示ケースでは、名古屋港水族館が行ったウミガメの漂着個体の調査で1個体のオサガメの胃から回

表1 パネル展示 タイトルと内容

番号	タイトル	内容
1	環境を変えたのだ〜れだ？	緒言・身近なところから環境について考えてみようという問いかけ
2	(無題)	ウミガメの調査で胃内容物の中に人工物が見つかることがあるという事例の提示
3	いつまでもウミガメと一緒に泳ぎたい？	プラスチックが、海洋生物汚染の主要因になりつつあることの提示
4	プラスチックごみが海鳥を殺した	死亡した海鳥の胃内容物の事例と海岸に流れ着くごみのプラスチックの占める割合が高いというデータの提示
5	ゴミの中を泳ぐアカウミガメ？	漂流ゴミの集まる場所とアカウミガメの回遊経路が重なっているデータの提示
6	マイクロプラスチック問題	マイクロプラスチックの生成過程
7	プラスチックごみのゆくえ	日本から排出されたプラスチックごみの量や海洋に流出したプラスチックごみの推定量
8	私たちにできること	リデュース、リユース、リサイクルの紹介
9	名古屋港のゴミ・名古屋港をきれいにする	名古屋港に流入したり直接投棄されたごみの紹介と、名古屋港を清掃している組織の紹介
10	(無題)	持続可能な開発目標 (SDGs) の紹介

表2 モニターで上映しているプログラム

タイトル	製作機関	時間
知ってる?あいちのうみのコト カッパの清吉と学ぶ「海ごみ」問題	愛知県環境部資源循環推進課	16分29秒
プラスチックごみ問題について調べてみよう 〜藤前干潟から考えるプラスチックごみ問題	名古屋市環境局（「環境デーなごや」実行委員会）	39分00秒
名古屋港と川をゴミから守ろう	公益社団法人名古屋清港会	5分10秒
ウミガメの研究	名古屋学院大学 (Project758) ※	3分58秒
海の環境問題	名古屋学院大学 (Project758)	4分01秒
名古屋港水族館はSDGsを推進します	名古屋港水族館	3分20秒

※ 2013年度文部科学省の「地（知）の拠点創出事業」として、名古屋学院大学と名古屋市が行っている地域活性化策。

収された3リットルの標本ビンいっぱいのプラスチック製品や日本各地の砂浜からサンプリングしたマイクロプラスチック^{注)}、水族館の目の前の海で回収された生活用品のプラスチックごみ、日本海沿岸で見つかった海外から流れ着いたと思われる海洋プラスチックごみなどを展示しています。海洋プラスチックごみの問題が、身近な国際問題であり、海洋生物にも影響を与えていることを実感してもらうことを期待しています。

より深い理解のために

環境問題は展示だけで十分に伝えられるものではなく、実際に生きものや現場を体験することで初めて来館者の理解が深まり、行動変容につながります。そのため名古屋港水族館では、展示、調査研究、体験型プログラムを組み合わせた環境教育を進めています。

現在、力を入れているのは、名古屋港に生息する小型鯨類のスナメリの調査とアウトリーチ活動です。名古屋港水族館ではスナメリを飼育していませんが、水族館の目の前の名古屋港に生息する身近な希少生物として継続的な生息調査を実施し、その成果を北館「発見コーナー」で展示しています。最新

の調査結果や映像を公開することで、地域の自然環境への理解を深めるとともに、水族館が調査研究を行う機関であることも伝えています。一般市民を対象とした「名古屋港スナメリ観察会」も開催しています。事前学習、乗船による野生個体の観察、事後解説を組み合わせ、体験と学びを一体化したプログラムをこれまで2年間で延べ8回実施、約170名の方が参加しました。その結果、参加者はスナメリの存在や保全活動への理解を深めるだけでなく、環境保



写真4 清掃イベントの様子／石積みの隙間には「海洋ごみ」が隠れている。後ろに見えるのは北館のスタジアム

全に対する意識や行動意欲が向上することもアンケート調査から分かりました¹⁾。

名古屋港の運河にある石積み護岸での清掃イベントも行っています(写真4)。参加者が実際にごみを回収した後、海洋プラスチックがスナメリやウミガメ類などの海洋生物へ及ぼす影響について解説しています。このイベントでは海洋ごみを回収できることも成果ですが、それよりも海洋ごみが自分たちの生活から排出され海を漂っていること(図1)、それらと海で暮らす動物たちとの関係はどうなっているのか…等、自らの体験と学習を結び付けることで、海洋ごみ問題を身近な課題として捉え、「ポイ捨てをしない」「周囲にも伝えたい」といった行動変容につながっていくことを期待して実施しています²⁾。

一方で、課題も存在します。イベント直後には意識や行動意欲が高まるものの、その効果を長期的に持続させることは容易ではありません¹⁾。そのため、展示、調査研究、観察会、清掃イベントといった各取り組みを単独で実施するのではなく、相互に関連付けながら継続的に展開していくことが必要かもしれません。

環境教育は、学校教育、水族館のような社会教育、また家庭での教育の中で、複合的に粘り強く展開しないと効果は表れにくいものなのでしょう。良質な教材も必要です。

名古屋港水族館もこれまでに、名古屋市環境局が運営している環境教育の拠点、名古屋市環境学習センターの出張ワークショップを館内で年6回程度開催したり、環境学習センターのネットワーク「なごや環境大学」が展開しているデータベース「なごやSDGs街(マーチ)」に参加し、その中で地元の大学とSDGsとプラスチックごみについて学ぶために作成したワークシートをダウンロードできるようにしたりといった連携を進めています。また、国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)が公開するSTEAM教材ライブラリーのようなものも、水族館用にアレンジして活用できるでしょう。

水族館は、生きものを展示する施設であるだけで

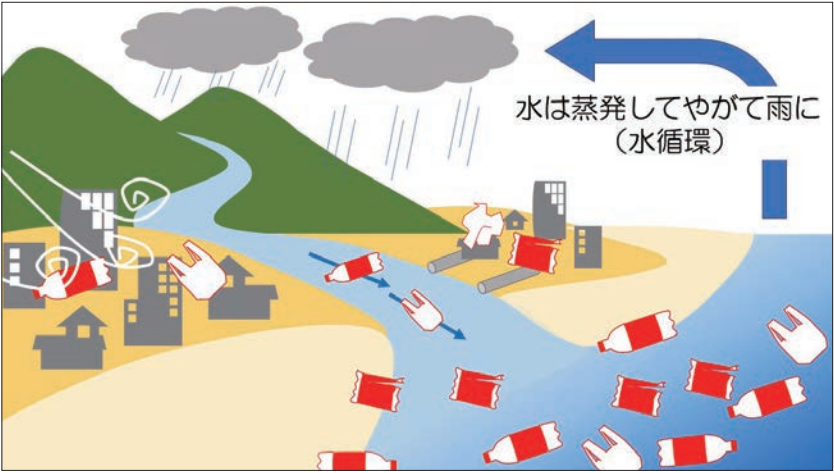


図1 街のごみは雨で流れ河川を通じて海に行き着く。水は循環するがごみは海にとどまる

なく、研究者、教育現場、行政、地域社会をつなぐ環境教育の拠点として大きな可能性があります。これは水族館が研究の場であり、教育の場であるからにはほかなりません。世界動物園水族館協会は、水族館は展示施設にとどまらず、教育機関、行政機関、保全団体などと連携しながら環境教育と自然保全を推進する役割を担うべきであるとしています³⁾。地球規模で環境問題が深刻化する今日、水族館には生物を展示する施設という役割にとどまらず、科学的知見を社会へ還元し、人々の行動変容を促す環境教育の拠点としての役割が一層求められています。生きものの魅力を入口として地域の自然や地球環境へと関心を広げ、研究成果と体験学習を結び付けながら多様な主体と協働していくことこそ、これからの水族館が果たすべき使命であると考えます。名古屋港水族館も、その使命を果たすため、地域に根差した環境教育をさらに発展させ、持続可能な社会づくりに貢献していきたいと考えています。

注) マイクロプラスチックの定義は研究者によって異なるが、ここでは5mmよりも小さい粒子という定義を採用している。

<参考資料>

- 1) 加古 智哉・宮嶋 桃子・日比野 真大・福本 洋平・神田 幸司. (2026). 「名古屋港スナメリ観察会の環境教育効果」[第66回日本動物園水族館教育研究会(いわき大会)要旨集 保全へつなげる教育普及活動〜ACTIONにつながるプログラムとは?〜]. <https://jzae.jp/wp/wp-content/uploads/2026/06/2026-iwaki-youshi.pdf> (2026年7月9日閲覧)
- 2) 吉井 誠. (2026). 「海洋ごみ清掃はいろいろなことを語りかけてくれます」[さかなかな] 130号, pp.1-2. https://nagoyaaqua.jp/wp/wp-content/uploads/2026/07/2026_06_26%E3%81%95%E3%81%8B%E3%81%AA%E3%81%8B%E3%81%AA130%E5%8F%B7.pdf (2026年7月9日閲覧)
- 3) World Association of Zoos and Aquariums (WAZA). (2009). Turning the Tide: A Global Aquarium Strategy for Conservation and Sustainability. WAZA. <https://www.waza.org/wp-content/uploads/2019/03/Aquarium-strategy-EN.pdf> (2026年7月9日閲覧)